

3. 「家族」

あさ あさ ひがし そら むらさきいろ くも なか ひと かぞく
朝な朝な、東の空の紫色の雲の中に、一つの家族がありました。

まずおばあさんが目を覚まし、家中のお掃除を始めます。恰度その時女中は

だいどころ かまど した た つ ばあ そうじ す だいす ときたま
台所で、竈の下を焚き付けています。お婆さんはお掃除が好きで、大好きで、時偶

じょちゆう そうじ す じぶん
女中がお掃除をしようものなら直ぐまた自分がやりなおすというふうでした。とい

ってこのお婆さんは、何もそれ以上に邪慳だというのでもなく、むつかしや

のでした。そういうわけで、朝な朝な、此のお家では箒の音がする時に、だいどころ

かまど なか ひ も
竈の中で、とろとろと火が燃えてるのであります。

まもなく此の家のお母さんは目を覚まして、きょうだい まえ かみ ゆ こども とこ
鏡台の前で髪を結います。子供は床

なか め さ きょうだい となり へ や かあ あたま きじ きれい
の中で目を覚まして、その鏡台のある隣の部屋で、お母さんが頭の生地を綺麗に

するために使う布が、ちい かなだらい なか あつ ゆ つ しぼ とき
小さな金盥の中の熱いお湯に漬けられては絞られる時の、お

ゆ しづく おと き とお め さ せきばら たばこぼん おと
湯の滴の音を聞いています。やがてお父さんが目を覚まして、咳払いや煙草盆の音

た はじ きゅう いえじゆうかつき てい き そら い からす なきごえ
を立て始めると、急に家中活気を呈して来ます。空をわたって行く鳥の啼声まで

が、きゅう はや おも
急にテンポを速めるように思われました。

やがて歯をみがいて、ごはん た ようふく き こども がっこう とお
御飯を食べて洋服を着ると、子供は学校に、お父さんはお

やくしょ い
役所へ行くのであります。

さてその学校が何処にあるやら、そのお役所が何処にあるやら、それは雲の中のこ

とで分かりません。

だが、朝な朝な、東の空の紫の雲の中に、此のお家があるということは確かで、

みな おお みな とお な ばあ い およ
皆さんが、やがて大きくなって、皆さんのお父さんも亡くなり、お婆さんは云うに及

ばず、お母^{かあ}さんも亡^なくなって、皆^{みな}さんが今^{こんど}度はお父^{とお}さんになった時^{とき}には、それがほん
とだ^わと分かるのです。